11
9
3410

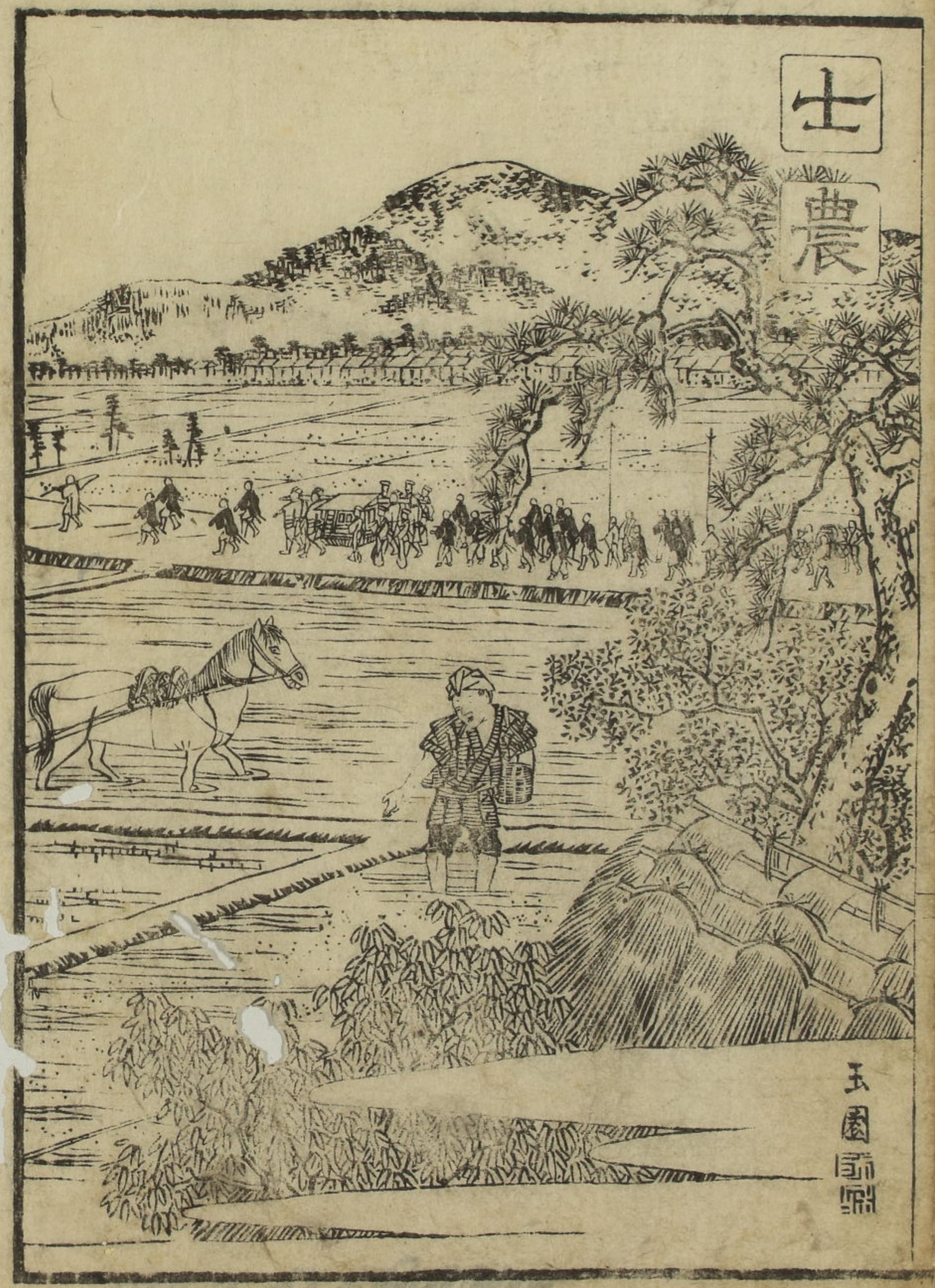
ロ9
3410

大舜
鳥獸孝行
耕作ヲ補ク

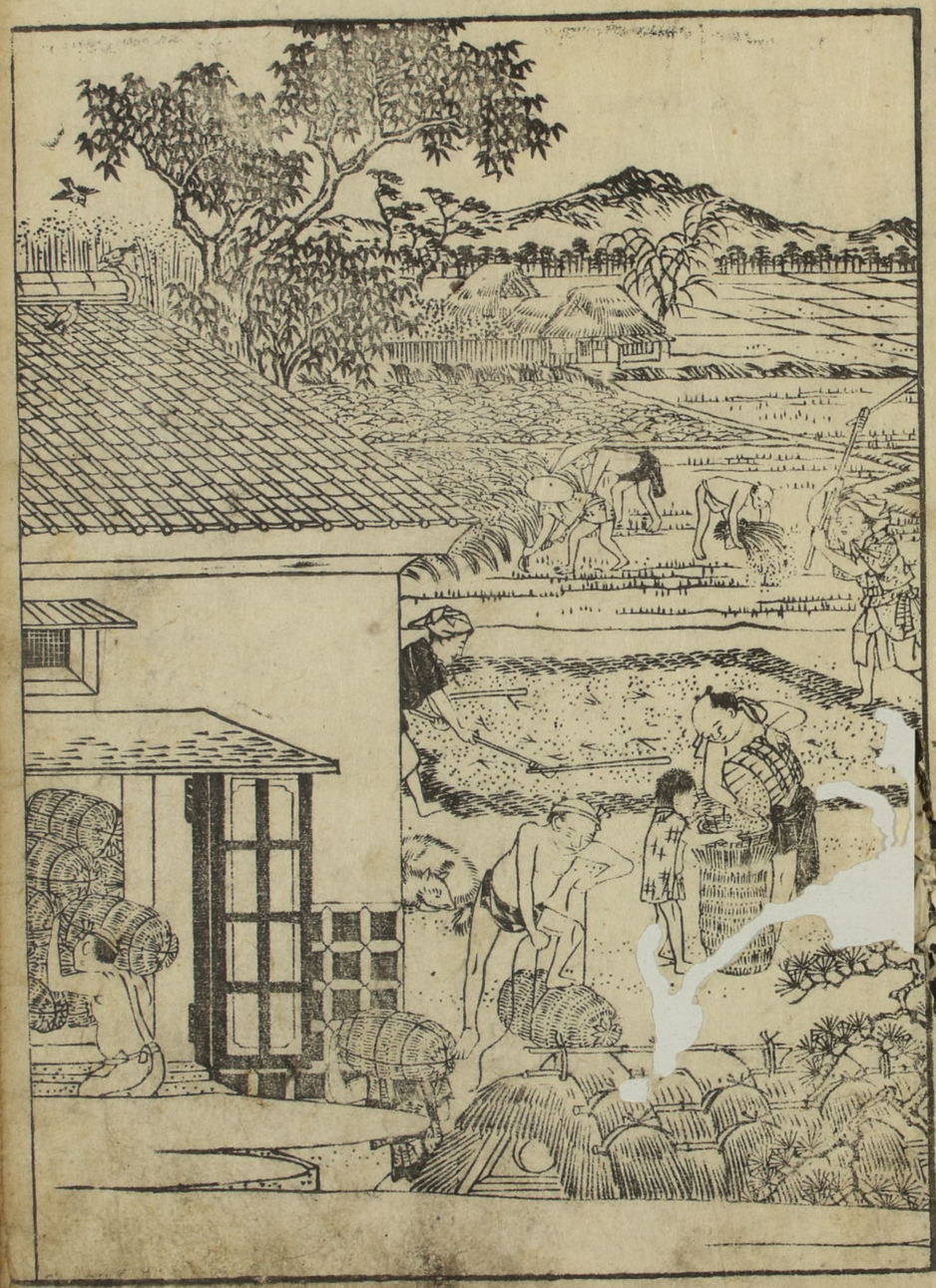
9
3410

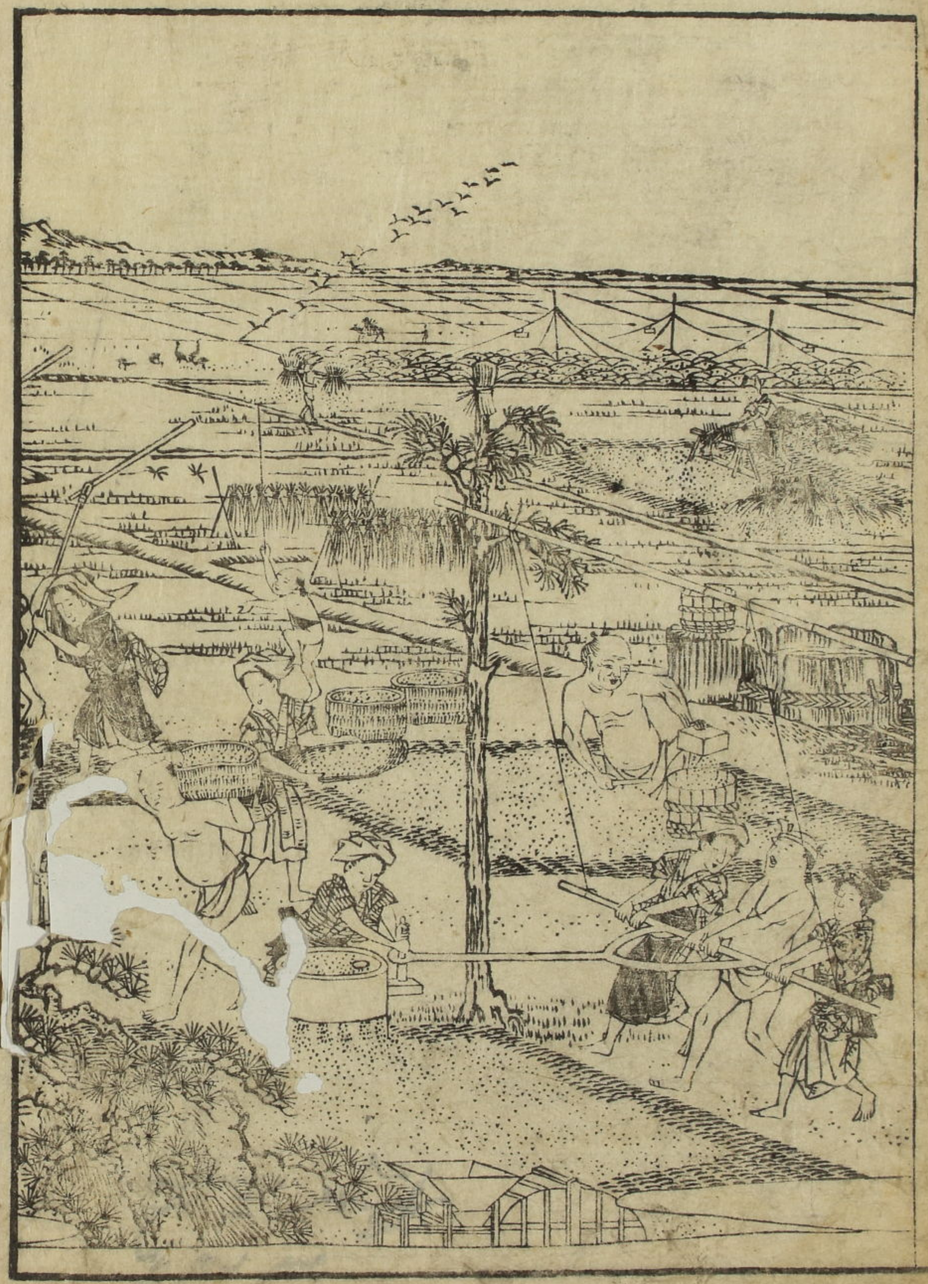
孟宗　此人は玄冬に竹中小母
病乳ふ那ほめるとのとて筆を
ゆとひ[illegible]玄冬を感ぜ有るん
藪中に独の美味生じ孟宗
泣びて　拘ひ母くまいこせるが
病乳も新に一金使ひ年齢も
いと久しゆりけるとぞ

丁蘭　丁蘭は河内の師まと
云ふの人なり母ふかくもて木像
を刻こ彩書生るが如く給仕ま
しける事恰も木像の面を火
ふく燃と事の出を見て
く驚きげこう丁蘭まぬ
ことを恐べ夜の間えの如生ろの


士
農
玉園画

工
商





女子學

一夫女子武長

仕る男子

約束他人の家へ

嫁娶不

そのなまじ

よりも親

夫婦は縁をむすぶもとを
家相續のためるをべわ要
と守るべし分限といふ
ふあり見合と云ふも強ち
ふ美貌容ちのみ見合を
るふと有まじ夫相要の
所他を見合べし費なく
共過分は重ねぜば余り倹
約もふ相應なり過ぬるる
ふ分限をまもるこあり

義ゆるせ
ば父母
愛して恣ふ
乃
ぬまば夫
はゆりて
夫婦
へ疎

縁談の仲人は大切は勤なり
媒の云ことは双方の実親な
ば或ハ或は病其外一矣
有をも包まず語べし仲人
ハ他のふのふ偽飾る事を云
ぜ実を取繕ふと記ハなく
孫く永久は揚波しまく
双方の悦び大なるべ是波
の仲人と云べし嫁と成則
如雅、ふ両親のムムし我

れ又い婿は海
西し
思ひ婿を恨謝
中
絶
を曝ぜ女子は

をひきて
勇ひべー　懇篤
成さる時は甚だ真ー一時
小説の如く仲ーしまを
忘れ一次男姑小孝を作くし
夫を大切にするの行要之

毋の亀洲なる事況
得ずして　男夫乃
愚さきの人物なり
誤なり　是落如る
友なる

○結納の小袖積やうの常は如
くつして袖をくさねるり亦婚
礼の後聟の方より嫁小巻に
小袖一かさねを送小袖といふ
襟とあるとを合せ糸ゆて
ちて巻にするとちやうへけふ
結ひゆー七所閉る
なり

婚礼の小袖
積ふへ襟とあの
合をて袖を
糸でとうべー

一女ー名容よりもんの
傍まるを若ーしべー
九歳堂ー夫女いん
強しく眼忍ーく
乙出ーしくーと思
三業匂み地いひ

逆小袖積やう

婚礼の小袖

畳こと

積たを

帽を合さて

横ゆ出せ

積め

婚礼の小袖積ゆ忘れても

袖を加へさぬのと知べし

小袖閉やう

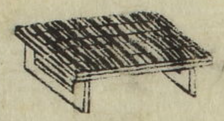
二前

歌

さぐれば紙をて人よ
ちんを人を抱嬢と
家に分よ待つて人を
清家ゆ出る人よ待つて
無るい乃女の乃
千遍なるなり女を

雑子積やう

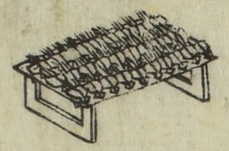
昆布積やう



鰹積やう

鯉奥積やう

鰤積やう

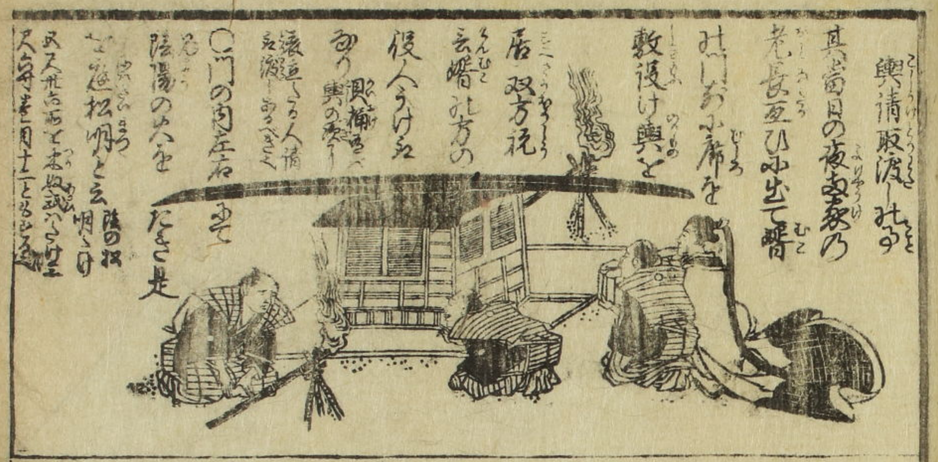


家内喜多留

わざ順ひて貞
伝よ情深く嫌なる
をよ
雁子ゆい雁附よ
一女子列を西く
男女子列を西く
志て俺初ゆ戯

結納の之事

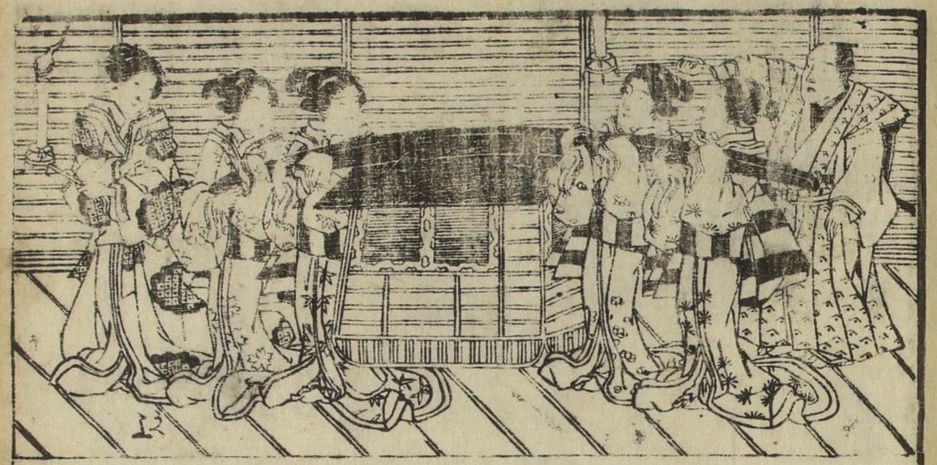
媒仕來て約諾とのひて
婿の方へう結納の祝儀を
はべ〜儀式礼をなして再
び雲ぶる幸ゐ夫婦のけい
約のうつ二重練の小袖を板
の物三〜縮緬一反縮緬一
幸義白綾一切〜三重樽を
七種七色のくるべ中絲小袖
一板の物一縮緬一幸義一切〜三
重と又若の又種〜くるべ下ハ
白小袖色ごの小袖一幸と三荷
三種〜くるべ嫁へも右カ月
孫樽肴此へも小袖樽肴ホ
ゆくるべ〜



物ゆ結納とうきたる
ゝもまよ樂へ
直ちせば取ゆく
祭の吊燭を燒て
もく面〜他人は
ゝ及ぶ夫婦

陽のこゝろ玄又人東ね二十八ゐひろ二尺八寸
まを用ひるともとるゆり
興の通るまゝ社前の左右男女
両人完固を立て盃をつくなりたの
中に興を置一頭て左方の盃を
右方社固へ立ちとり合ひ
と打合の儀と云是ぞ盃と和
色盃一ゐも飲ひ一ん扨妻戸の際の
左右の燭燭を焼一居て是を
興社とゆり一遍ゆてたん方を左
へ渡一きんとゝと合せて消と紙
燭さゝと云是ぞ男の本八ゐ信乃
人の晩行ひゆふ礼ゆて本人の式
ゆへゆゝ

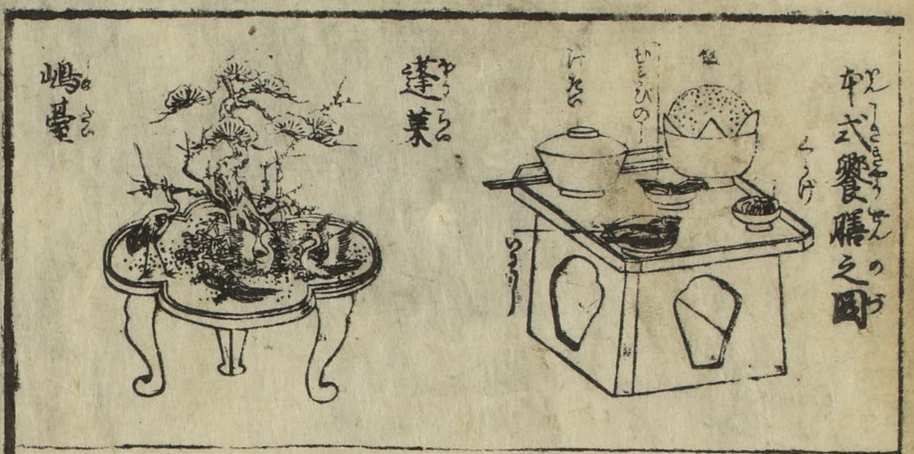
打合儀式之図



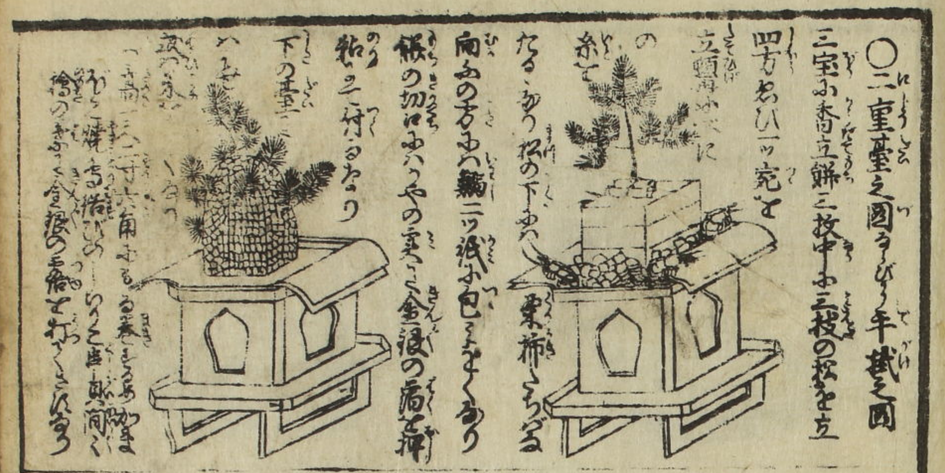
ゆゝ一生涯を
ゆふとゝ表ゆは
情さ事よりのゝ
女を入る毫父母の命と
媒妁とみあゝざれば
交らび祝まゞを小

夢のまくらとなれば
命と共に
金子和さんおくよ
して義を書べし
一婦人を夫乃家
をわが家とする為

屋敷
堂
るとい婚事
縁合
なわ
ちよ

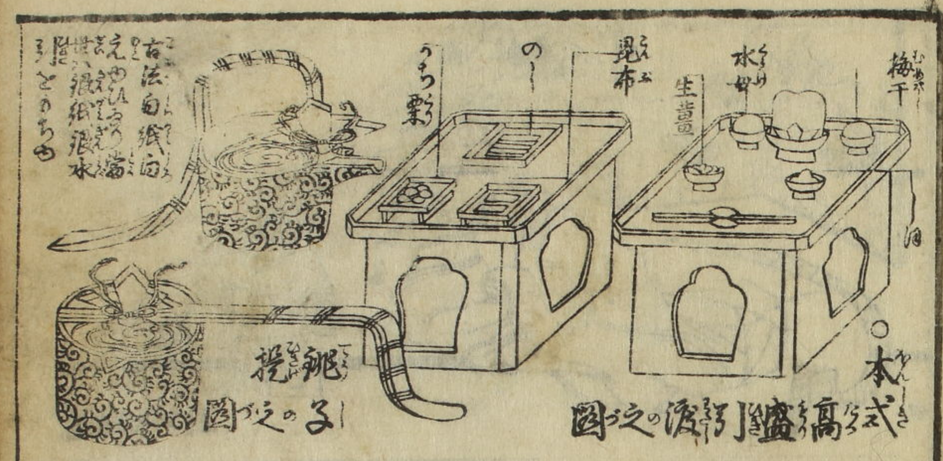


まへ新郎新婦貴い家
仕合者函有なりと
おもひ一度嫁てい
其家を出ざ新郎と女
の乃とまることなしへ
聖人乃訓なり若

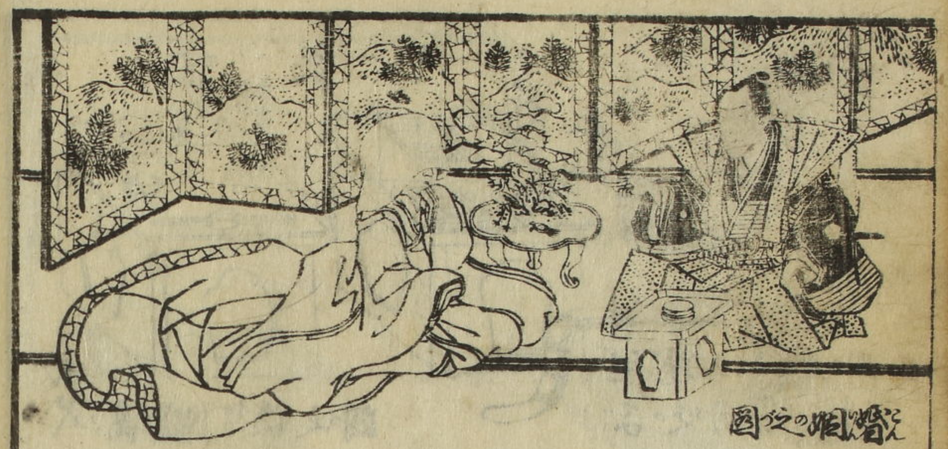


女の道乃基もき
ち新郎時ふ一生ふ
恥なり性まい婦人
七方ふ
あり一ツい嫁ふ帰ざる
女を去べ〳〵二ツ

子なき女と云べ
き素と悪いる孫
相撲乃為なれば
絵もども婦人乃心
平く形儀よく
して如為なくで

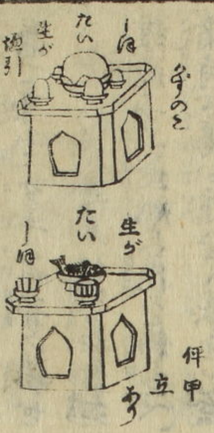


さるとも固姓の子
と生長人為て武は
高あるよるあるば素と
子形くれ去よ及ば
ふ濃礼なれで
所四よい格礼ば

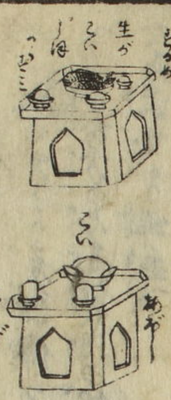


婚姻之図

○本式高盃打形之図



○本式高盃陽変之図



色直小袖の図

草ざおりし
結びふ結
ふ図のごと

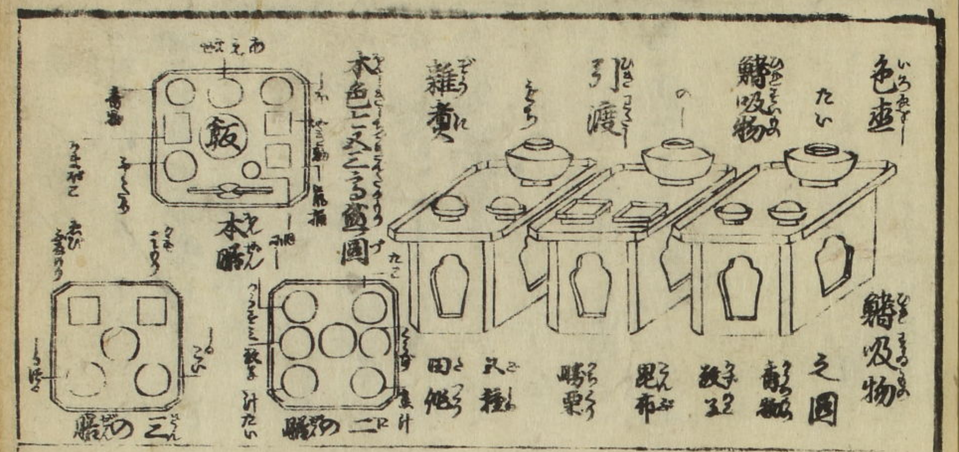
上臈出立之事

下ふの小袖半襟の小袖向様の
袷のうへに上着るあり座ふ付く
八重ごろも巻ふらべ〜

夫婦乃具かさねのうち
女の通具八重目物さん得る女
中と婚の元くわう元越て婦ら江
べ〜夫人の方乃を具内の西女
たち第日ゝう婦垂べ〜

三盃賄那当ゝ宴ゝ

兼て床ふ二重半掛食の賄せ
きゝ三いの壁蓬莱対壁名垂
鯉親子三盃組る花を飾垂べ
備侍女鶴お近いく嬢を化猿
の間へ淡ひ衣絞ゝと結ひ里蒲



富貴乃家乃夫人ハ嫁を
とるとも女の道ハ
て大切乃家乃尊なり
一女子いとゞ家乃ひ
ていと嫁父母乃者
を沙へ理りなりさま

ども夫乃家乃
ていと者嫁をとゞ親
よりも重んじて家く
重ひて敬ひ孝行を
曲をべ〜親の方と
童ど男女ゝ方と姫

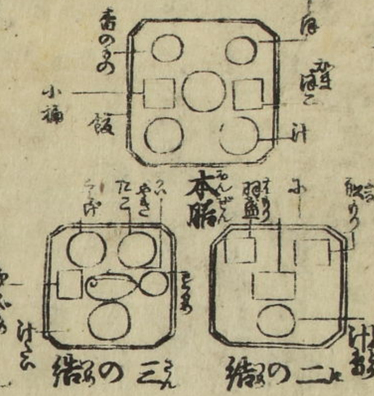
小具足を支度させおいて先づ仲
人を待上鶴月お茂樣抱上て夫
婦の盃昆布雲累を出てそ
れぞれ一備おとる一九女房二人お
て婦ッこる銚子を一ッ充とりて个
座へ出る又敬五二人銚子提を
出て是も个座へさるべし備
銚子の女樣を出て作間ッを
酒を提へうし又男樣を出て
女樣のうへ低間でさる間しく
提へ酒をうし備提ろ銚子
へ紙注ッ移して銚子提の敬表
前ッ構えて待ろ仲時引ッこ
しおて夫婦と待ッ鶴小居べ
し敬ッ盃を夫のまへ持参ス

ずるこの事ッ嫁乃
あれ銚子夕のうんまひ
と酒べさ敬五ッ嫁のあれ
勤べさ業と怠ッか
ッこ嫁ッ嫁者
命あふ情行て肖

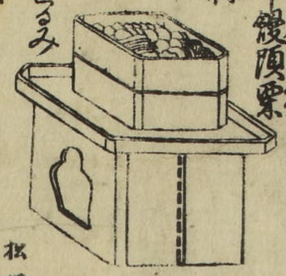
夫ッこの去状ッ出て三献のこ仲時提
ろ銚子へ酒を加ふべし備夫婦加へて敬ッ三献
ろ乃真外を嫁の前ッ持参ス
嫁も三献のむ嫁の傳ッこの女房
去状を个へ重ね物ッ如く
床へ置ス一ッ時打鳥を
ろ波しの右ッ銚ッ居て又敬人
三盃を出て嫁の前ッ持さんス
嫁ッ二ッ三ッ二の盃ッて三献参
夫ッこさス夫婦ッ盃ッて三献のこ
个又去状を个ッ小ッこ
中のむ三盃ッ个座ッ
て去さるべし宴ッて傷費へ

ッこ嫁のこ男樣
ッ嫁ッ
ッ嫁者
ッ嫁ッ
ッ嫁ッ
ッ嫁ッ
ッ嫁ッ
ッ嫁ッ
ッ嫁ッ

本式又三寸盃之図



十二組菓子之図



つる西まで慎いうれうど
中婦好なる者の也
一婦人を別に主君
なる夫を主人と呼び
敬ひ慎む事専
慢傷ふ為べし

引渡し左の方に居て砂糖
三盃目と云て夫の前に指来る
夫と小有り三の盃めく三献
のこと有り夫の前に向て指
嫁三献のこと済るの砂人盃
と中座へ出し引渡し お形
腸煮とも小引下夫へ立て
居間に入る次に出しその
汁へ鯛の吸物とのとき待る肴
はやはるど献くあるべし
一献目と出し
人の子
鄭重する者
絮
漁
不思議

婦人の子
流なる夫
新色云
陸の肴
勤
婦なるべ
順か

いまざらん奢く
無禮なるべからず
女子ハ才一も勤かり
夫の教訓おろそかに其
仰を背くべからず疑
ずして夫に

二つある所の盃臺に居へ挑子ひさ
げも金銀の蝶に替ゆれ式
あり待上臈立て押入の肴臺
し夫婦に参らせ備式法の湯
漬を出し菊の吸もの酒も同
く塗盃をもるべし家子も饗
膳の金銀あり備十二組の菓子
茶器出す次に七五三まさハ又五
三つの本膳夫婦待上臈へ盃
臺肴臺をおし
式終りて床に入しむ是ハ有る位
の祝式にて中くハ平人の儀べきこと
に非ず家には紀にハ分限を把
とを沢罷の甚しきどもれバ祈
の如きる事ハ有る位の事と知りて

唯其下知に随ふ
べし夫問ことあらバ
正しく答ふべし其
返答疎なるハ
無礼なり夫もし立腹
[illegible]恐れて

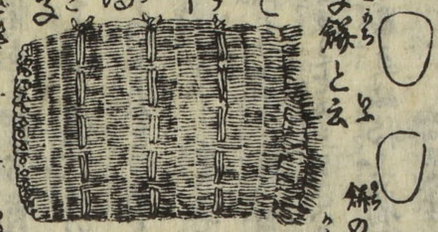
把ニ〆ばかりざる米を細しむるなり

○饗入又百八十餅之事

式八又百八十の餅を一餅

ツゝふくろに入て

ところ



是を皆ゝ餅と云

式八略して

八十八又十

八ふくろ

ところ又八ま

餅ゆして又百八十の数に充る

有り限ゝ蔵て群数有べし

○俗説に夜の盃八女ゝう物あて

夫ゝさ汝と云祝家ゆもまを祝こ

依て女嬢の盃を皆ゝ

るあり汝之外の婦ゝ礼ゝ曰

男先於女剛柔之義也天先於

地君先於臣其義一也書曰牝雞

晨喔以致禍吾日本神書曰陰

神先唱曰吾心哉遇可美少男事

陽神不悅曰吾是男子理當先

唱如何婦人反先言乎事既不

祥亦曰先蛭子生云云天神以占

占卜合之曰婦人之辞其已先揚

乎和漢の書ゝ見曰ゝ如

婦人の男ゝ先ゝ言ゝ

の湯これ凶ゝ

一日見公女公ハ夫の

男ゝ人ゝ

夫乃報ゝ

悔ゝ

如ゝ

て俗説の非礼不順ふことあるべ
くしかるに軍中のかの俗説のごとく
麁人士俗の家内にまた夜嫁と
待ち麁き外の者内皆賠祁
と問へ晉の賠祁ふこと
賠流て後腎と嘲ぎ嫁の面
て戴しかう潘岳さ風俗是惡
の沙法中及ん仕意ハ文姻合
仲の物あり孫永久法ひる為
實なる仁方歴て賠祁と搭え
天ふ遊ぶる文を無をのふ嫁
計と就容の如くあらるる上
のふ古いあり多うの俗説を
忌除さ八ぐ礼式ふ順ふ
無

賠しくとれい嫁の
んりまも恨文姻と
釈しと稚義者へ
清ふ文文丈文兄姻ん
雪ふくうやまへべ
異姻と同ぐすど

○本人ふ執行ふさそ夜の秘式
床ふ錫分限ふ意ひべしまけ
三盃八必ひあるべ一番ふ渡
出一三献右ふ一二番雑煮
三献右の如一三番鯖の吸ふの
出一三献右ふ如一三盃の乃
撤も右のごと一三三九貴髭ふ
て濟ぐまへ座とら備吸物いそ
待ち二腐るどへの盃右乃ごと
ふ献ひて く嫁ひと盃ひべ備
ぎ又又出て食をおひ又又三ひそ
も又ひ三ひても分限ふ後べ
高砂の臺るとあへ八ふ時出ひ
べ一酒も間をとべ一和菓ふ
とおひ又種七種或八打あるひ

一嫁姻姻ん嫁く
殺ふべくべ男嫁礼
なくど揃ぐ忌
怨べくべ姻ふあくべ
そ家色おと集ふ
忌ひ出ふく

三宝めとも備菓子て支度ろ
ろ弘ぐべ〜湯〜そをく床ふ落ら
ぜ晴まるう出ぜべ〜揚ゆ蝶
と付る事ゆ〜備色恋〜れる
花ふ泥ぜ如く嫁ハ迷小袖まを
太産の小袖と〜ハと美〜まゆ袖
義〜朝ゆ有べ〜
婿男へ見参之事
右の流儀ゆ〜と待〜義ゆ〜ろ
ひと男の玉ゆ〜べ〜嫁〜う男
姑真ゆ外小ぎうと〜るまゆ〜ふ〜で
婿男ゆ義の流義有べ〜流の
式ゆんゆ〜ゆけ〜ゆ〜和三盃ゆ〜
〜う流〜と男姑嫁三人へ居
男三献のゆて流ゆ〜ゆ嫁三献

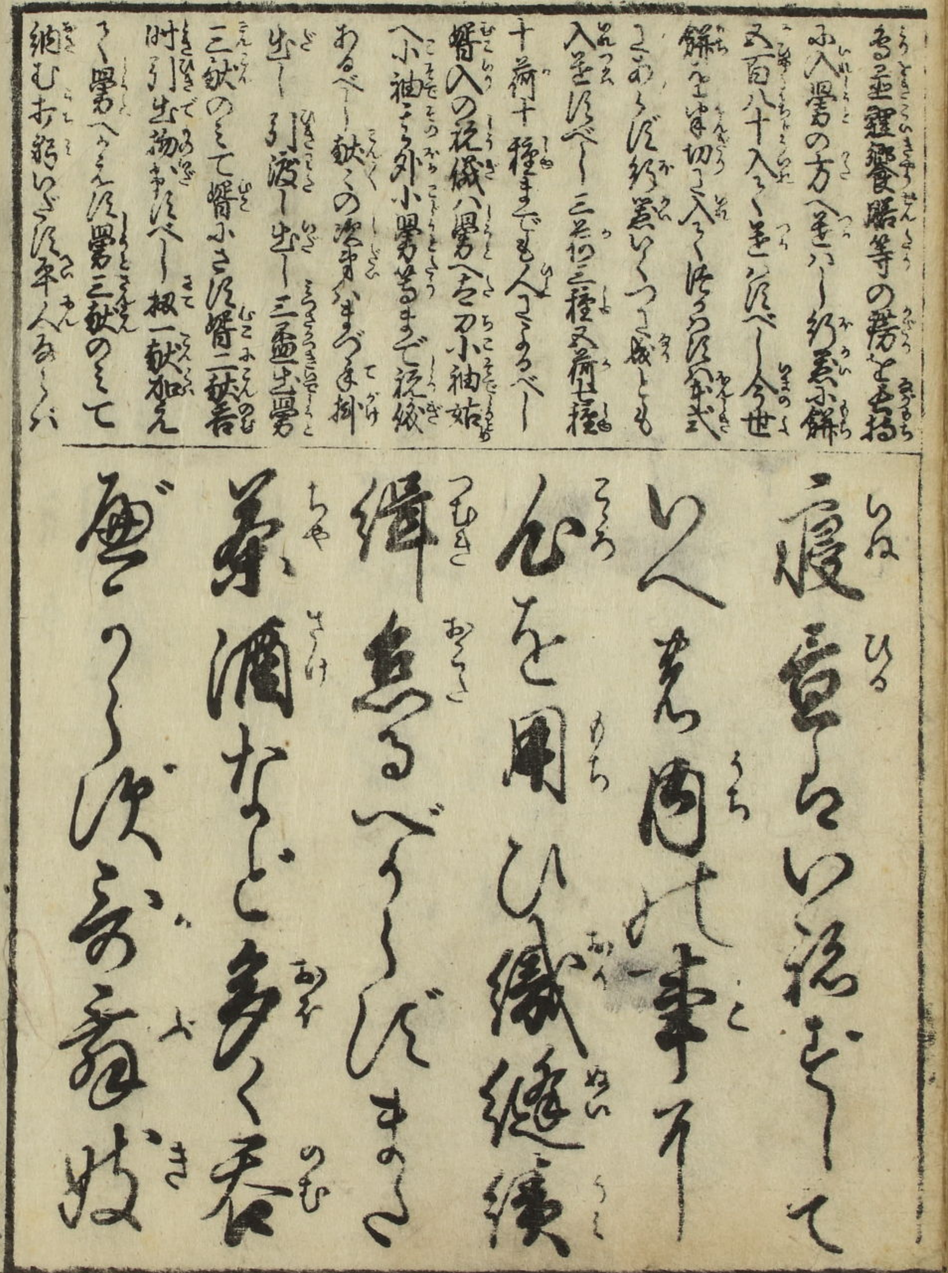
都ゆて支ゆ練まを
ゆ弘ら〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
ゆ〜ゆ支不義ゆ有べ
ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
と雅ゆて練べ〜練
式融ゆて無ゆ〜ゆ〜ゆ

聲く出て嫁ゆ支の
ゆ〜ゆ〜る時後練べ〜
必氣色と暮く〜
ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
よ逢ひ殺て〜ゆ〜ゆ
一言葉と懸て〜ゆ

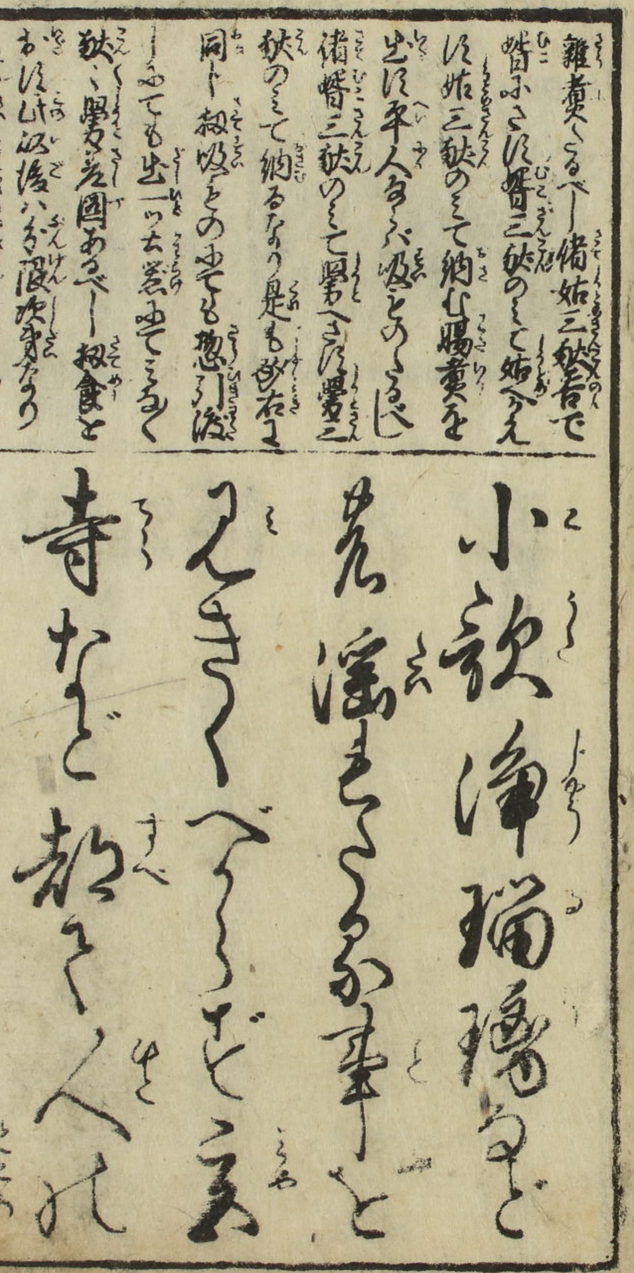
のむこ（婿）より引きものをすべ〜
又一荷加へて、婿（むこ）と婿二荷
ろくして網るなり家中にて打祝い
さて本人なるべき家にて雑煮い
たすべ〜姑者二の云ふ家中にて三荷
若嫁ここに〜嫁二荷のむこ（婿）へ姑
より引出物有べ〜嫁又一荷加
えて姑より〜姑三荷のこして
網じまり家中にて膳煮やるなり
本人なるべ吸物くるべ〜きの三の
云ふ家中にて嫁一荷のこして婿ふ指
婿三荷のこして嫁ここに嫁二荷
のこして姑ここに姑三荷のこして網
るなり是にて婿姑嫁りぐも
三〜九荷なり小婿そのなり有

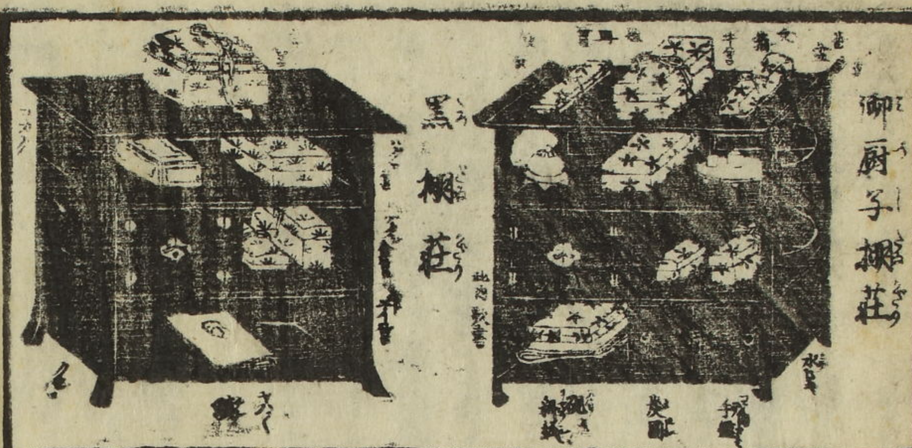
とべ〜〜〜べ〜〜〜べ〜〜〜べ

ゑるを重箱饗膳等の勝とする
ふ八器の方へ米八一紙蒸小餅
又百八十入こゝ米二合べし今世
餅を米切こ入こゝ焼ろ合式
こゝ合ろ紙蒸いくつ成とも
入米合べし三合ハ三種又前十種
十前十種までも人こゝろべし
婚入の花儀ハ器へ右の小袖始
へ小袖こゝ外小器ゑるまで夜紙
あるべし鉢こゝの次第八まづ掛
出し引渡し出し三盃出器
三鉢のこゝて婚ふさ合婚二鉢若
時引出物ハ合べし椀一鉢ハ
こゝ器へこゝ合器三鉢のこゝて
絶むお祝いこゝ合人ゑ八



雑煮こゝ合べし備始三鉢若で
婚ふさ合婚三鉢のこゝて始へ
合始三鉢のこゝて納山賜煮を
出合人ゑ八吸とのこゝ合
備婚三鉢のこゝて器へさ合器三
鉢のこゝて納ゑなり是も砂右こ
同ト椀吸とのゆそも惣こ海
こゝ合ても出一ツ右若ゆてこゝ
鉢こゝ器又若図あるべし椀食を
おこ山出合ハゑ限次第なり
婚後床飾ハ備乃ゑ
こゝの婚礼ハ座敷も新こて
床も三間床こゝ合べし二間床ゑ
こゝ外ハ又付床あるべし二重
又懸ゑ右こゝ紀合ゆこゝ





陪りよりはべらず況
一座現などのごとに
遠ひて神佛と
汚し近つき穢れ
祈かべらず只人
冨乃勤とよくとれ

べし外小まの衣形と衣服を
ひの夜着ふとん等ハ紙かり
有べし女房の乃ぞ家内
車列ゝる女中乗ぶるべし
左もなき人ハ色恋ゝの間と外
来る女中かさねべし御厨子
恵棚ハ床の次はかと清べし
黒棚ハえ袋棚とのべとも皆
紙ゝふく物と云間をいとく
黒棚といふ物ハ是ゝ清乃ぞ
恵西あり貝桶ハ床と清べし
床なくハ納戸ゝ戸をあけて
[illegible]
書物ハ書棚ゝ拾べしこれをハ
遣棚ゝ清ゝべし棚なくハ床と

時ゝ清らぶとく
ものゝ神仏いまるべし
一人の書と第てゝ
物ゝの物をよく保
物ゝ妻若清ひ
恵く物なれど

一美人と見えし人は
新橋新友達下記
者は男の男女
歩く姿さる絵ぐさ
乃ち隅を固とべし

亟べし女房の衣物紛こ衣物
と拵てくるべしこ車はその
夜七つ時三つ目ふ丸くをく丸
ッかけ丸ッ目ふ三つ時べし衣物
ハ二つも三つも有べしゆゆ
ハ衣物こそ上産こるべし素
間こ女房の拵せる夜具ふ
こん化粧の間ふくバ宴こけ
ちゃうの乃ちこるべし廣間
ふとハこ夜こうべ時間ハ
合せて紙面こそ亟しこ大概
加ハの如し分限ふ表し料
理ふべし男入のふも大ひ
腎入こ准ト丸紋べし

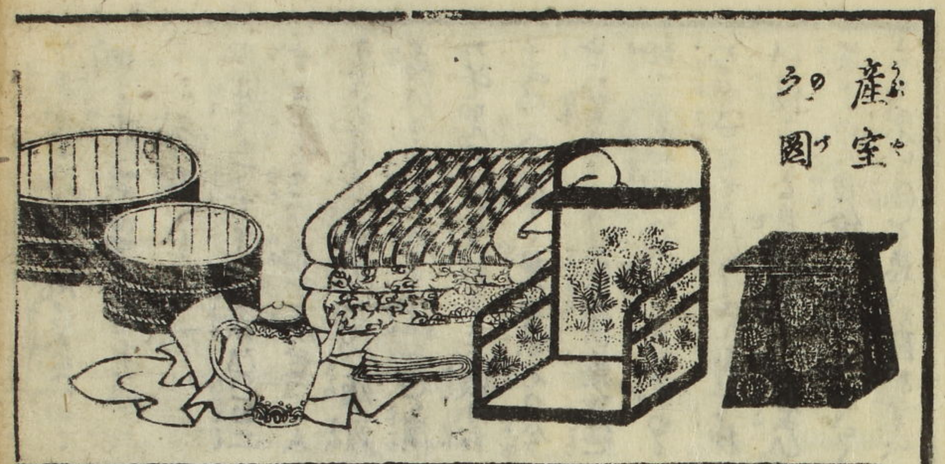
家紋結る第本
像ふ其費と作
亟こ沢衣物飲食
こ沢和泉
書る

著帯

藤姫又は藤ふるうて右腰を表
らひて表行べし〜赤と白あ
ゝ云さこ八ゝ八ゝとして丈の左
の袖このり波と女房右の袖交
ゝ〜結び物也〜是八白生の
説云ことなり右の白さ絵とる
産ること真綿ゝのとう小紋を
付ゆるゝ〜漆てるゝ表ひべし
是八ゝ藤きゆゝ波ゝふとう
袖と云なり洋屋へ帯者を表
べし〜又帯の紋と云良家の妻
人女産の八ゝを表ゝ帯を異ふ
ものの更衣ふ結び物る時八右の
如く是ゆもまふ紋織有べし

みをべし〜身と衣
掛とゝの縁ゝ〜く
潔ふるゝより傷ゝす
清ゝと曲〜人の目ふ
立ゝどなるふ八悪〜
只ゝ〜ふ射ゝ悪〜

産室の図



産道具

一、鋏一対女中の打まるを入る物二ツ合鋏一対男のうり産の事に合の便懸帯といふく者の為うけ又ふの湯をひのくる時うバ鋏うけ中用の枕大小ひまく産ぶくまくられふとこび中用の湯桶たらいひしやく何ともに新しく大小おのべしひさご二十ほ個十二ほ箱十二ほ布くるべし端おしぼりふく個べし前掛巾の児湯をひのくる小ぶの二ツ連この七ツ合ハ是を産のうとう産ぶくひろ反べし紙ほ敷の如く布ふくぶべし湯揚ぶの身

さるを用ゐべし

一、新品私新品を産乃前に

新品を次に生べ

からだ正月元日

なども生る丈産

方を勤て次に新

新しの方を使ふ産

産の時ざる

何方へも野

ぶく私に人ふ腰

のとべかゝぶ

と雖ども風俗の如く
細さ布にて陽ないとゞ
色遊
兒生まれて七十又日或ひハ百二
十日あるいハ色の物を着せべし赤
うぶゝ有べし元兒の間ハ絹の類
惡しかるべし惡しき氣と損
ひて兒の病生ずるなり嫁小吉
人の人ハ堅く禁め慎めり今
世ハ堂々の花麗の物を絶
切て着せ剃へ頭巾まで赤ぬる
ハ甚しきと云しかるとて都て換
ひ傷るゝと是迷ものゝ強ひ
家業の人世俗に流れて歩て
しも兒の病を患へハ斟酌すべ

一女い我親者都
とゞ續と男姑乃
泊と連ゆ恵りわゞ
親よ思ひ者行を
切る嫁てない
為べし

わゞ親の都ゆ
来も奉なべし
婦と他の都へ大
形も使を書りく
吉間をうたべし
親石ゆよ紀と紙

喰物

男女ともに生て百二十日あゝ日を経ては喰物有べし男子は男養あべし女子は女養あるべし母うしなへば児を抱き出て喰物の親うけとりて先の乳腺に乳を居るべし食あるべきすゞ飯の粥を丸くほうんの腕の間に乳を扱を三箸一ゝ入て汁を呑る什あるべし○餅又は腕の左の腕より居るべし是とも三箸食ふ

なり○右の抜様をもて後人の人ゝ法にあるべし

傳て賤しきる者この
らしば
一下記録多く
はべとも男は事
自幸学を為
勤るとの作法

ゝ出べし○此ゝ食物の親三
歩のゝ物の児ゝ出る児三歩
ゝる而へ親ゝ引出物あり
又児一歩のゝて打弱出り児
三歩のゝて親ゝ出る児三歩
のゝて親ゝ出又親一歩のゝて
児ゝ出る児三歩のゝて親へ
近に親一歩のゝ而へ児ゝ引
出物あり親ゝ二歩のゝて
親ゝ出べし児の産ふ後ゝ人あ
るべし本式かゝ出ゝ又ゝ
出ゝ雑煮へ吸ゝこのゝく
も分波ゝこのゝるべし○女ゝ
女ゝ親ゝ出べし根葱の
出ゝとのゝにあるべし

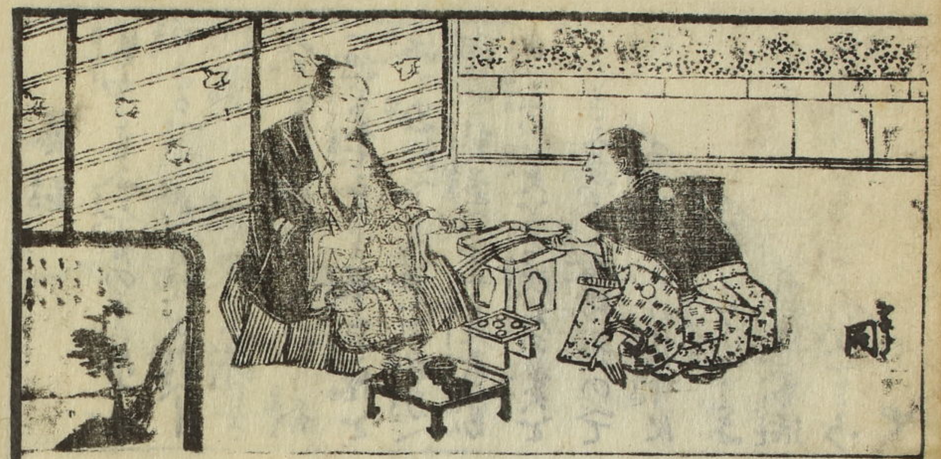
ゝり蜀椒乃ゝ為ふ
衣ゝを産食ゝを調へ
ゝ丈へゝ仕へゝ衣ゝ試
ゝ丈へゝ
ゝ奥ゝ席ゝ掃ゝ
ゝ清ゝ洗ゝ常ゝ
ゝ親ゝ肉ゝ

櫛を和へ出べうば
一下女を使うて
加ふ紙こちら四角一
云四角なる下
福ら智一恵くく
智恵形くん奸婆

髪結

男女ともふこすの十一月十又
日しるべ一是も紀を初べ一
紀の方ろう廣ゆこふ掃れさ
みうんのひ地ろうこの一各
一把素十七ゼ一ゼ七種を
流て出べ一○児を右方へ
向ひ髪毫のおや老者男
ふい左の髪と二筋右の髪を
三ちこみ挟こて扱ゆ一把のべて
額ろう後へ出くりけ長下に
の一こ素十七筋こと入こふ
江こ根をこんのひ也男結
びふあつるこ結その頭ころう
引ゆく二筋ゆ女ひこびゆと

物ひふこと祥す
丈ゆこと嘗姑姨
出ちとなど家ふよ
合ぬるゆあまび髪
下後時さこ老
き紙部る家者



と思へる婦人
の智恵なく
ちゃのまを伝ず
ていの水根を出来
安し元来夫乃
あいうれ他人なる

ず根を結さて悪
色を指ること安し
撞く下女の袖を
伝ひて大切なる嫁
姑乃新を落くを
かばひ乃下女

るなり三三九度の祝ひ食物
ふおるゝ

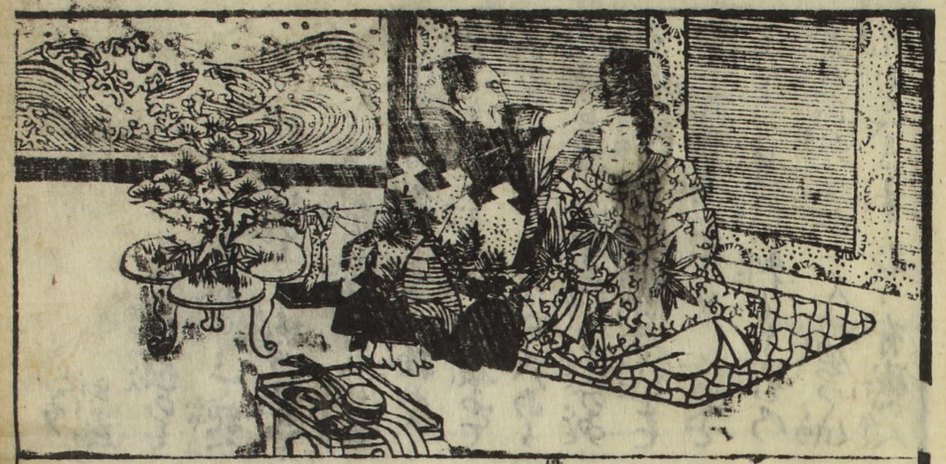
袴着

袴着は三歳の十一月十五日と
定べし是も親と定べしおや
のくくへを生じた色が大かく
ちん鶴亀松竹を付べし兜
を碁盤のごとき方ふ向を
てこうを後ろへ人方なりく有
祝儀の式内祝

本式の元服とは人間へ頂ふろ
んむへを加ふるを今世俗
用ゆべき事にあらざれ実
に暗に〇十五ゆくこと人の業

袴着

なるものなり忍
べし又早き老
成ふい氣イ人
を
ざること多きまこと
怨つて篤く山ざん
ぐ後稽古



ひ[illegible]と面白くあり[illegible]
の内静かなる[illegible]
なる事あらば[illegible]
云て[illegible]て酒を[illegible]と
面しかの過ち
忠[illegible]思ひ[illegible]べらば

心[illegible]内まいあり
[illegible]和ふい[illegible]親
と国刑[illegible]
[illegible]つ[illegible]
[illegible]べき事を
[illegible]妹を慰べらば

の礼をいわれば悪くこそ思はれ給ふ
○ものの礼儀
一つ下に見こそ給へ親三献のくて
さかずきこそ三献のくて親
返礼親三献のくて納め髪を
結ぶべし○髪の結やうに
行まわり髪ゆい換わり
結しかの是へ式の元服
前髪を剃わくるを
成人の式あるべ
なれば今多くは元服月代を
るの礼を用ひてくしとも
もたしと月代剃るも
元服の礼と思ひ人と思ふ
礼あるべき事

但家宅ふ入るに
とて用ふる立ぬ
者にて髪みぶりよ典
厚くしば
一元婦人乃元服
の要ちの病いわざ

服さると典服と人
を嫌る髪掛服と
智を恵沸さとかり
悪の病いを人とも
人の男子及び

ふるくより知へし今月代を
代とぞ云くさ〻の儀とせんなれば
親さん後の人に向ひて法のごと
く髪を結ぶ所の文に載せたる
法の如く結ひて髪を切り
と髭剃の盥ふあてゝの小刀
めくるやうにして可申こんろの
髪を結髪まゝ後に能法
式の如くして右の通りの決の
間へ立月代を剃て生ることを
可申こんろの月代を剃り乃礼へ
古来ようの礼式教こゝろれ元
後の式を以て能く斟酌して可
なるべくハ〇こゝろ髪を
主の知ぬやうにこゝろ

ざるまを所作の顔を
顔を戒て改去て
中まを智恵者
清ゆえ天の疫
疫る女い陰性
なり陰を取まて

所作の如い男
時しい沈ふ思うて
同前の前ある て絶て
と知らぬ人
の能ゝ ぬ
も奉へ ぬ

左の袖へ入て涙の間こゝろゝて
後見の人〻涙に涙ぐんの人
紙一面にて氏神の社に紙
を貼〻さいしの人ども社へ参
りの人〻涙を是ハ紙幡て
我ハと泣くまで家〻に有べ
父母の墓を尋ねさる一期とも
あぐんの死ハ相〻入く可
べ〻紙幡の涙弁に涙〻
お粥揚煎九献の酒さ死
さ死に〻同〻山越すき
て涙の食義多限ふる
無〻

人〻を恨べき事〻
知〻ず科もなき
人を怨こ思涙組
あるひ人を恨た
こゝわが身ひとり

婚礼祝儀の歌

一筆申おのり〻
方様〻人〻涙の長煩
山盛礼首尾よく
涙組ひ〻のに
結急の久〻さこと
始さ多代〻涙づ
世こと面をね出めぐ
たさ涙のふなり〻く
御〻ふ廉未なる〻

人世おとへど
人〻婚まま縁
まり〻みな家者
の仇となること知
らば家はのなく
涙猿〻るを育

にて有りまゝ
へ御指図を延紙
又来るとゝ様の事
りく嫁に行義の
事とゝくあれ海
めぐたくりく
りる

同礼参

御参下さる新
春りく作の通

こども愛す猫
とゝ様ゝ様の事
しく訳愚れる友
そり仰事もる部屋
とゝ様ゝ丈ゝ様ゝ
屋りく古の清ゝ女

婚礼済りく祝
祝入りまゝ付
清ゝ丈ゝ井ゝして
山様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様
又来婚ゝ様ゝ
新ゝ丈ゝ久ゝ
細りく番ゝ首
りく方ゝ山様ゝ
りゝ様ゝ

子を産む三日産
のゝ下に明りると
いへども赤ゝ男に
ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ
ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ
ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ

安産祝儀

女房のてかしこりて
家ろくちんぞのりの風
ゆんことをるくこと無
産おとこ〜 誠り
清雪ろ西まをろ
ふくく清双の風を
西様ちんろくを人を
ちのーさ様〜
御家風ろ人 流

とを立家分法
濃ゆ我ろのをるを
とを能とあり
ゆをも清るをろ
くく京魚と有
ろ人ろ云移迫

西風の狂
押ろ

あるも
せんどく清
祝びかりこりく
扇ちんたの取っ不
こくへども西まの分
一打ろ鈍の清まで

も清ちびてつく
あやまちは知らず
色重く人を増を
ざるをりに家分を
数又人を侮まても
くくも横ろの

清月の愛りく
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

月日

雙亟沈鐵弁

弁ふくゆこりく
時ならが〻球く外
[illegible]
海しのへるいく

[illegible]
おそ[illegible]
[illegible]
[illegible]
弁[illegible]
らざ[illegible]
く連[illegible]

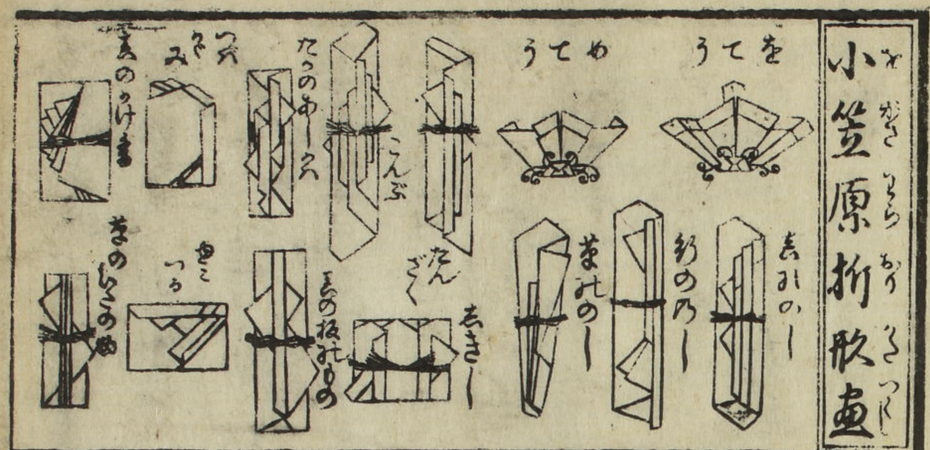
三十七

[illegible]
[illegible]
[illegible]

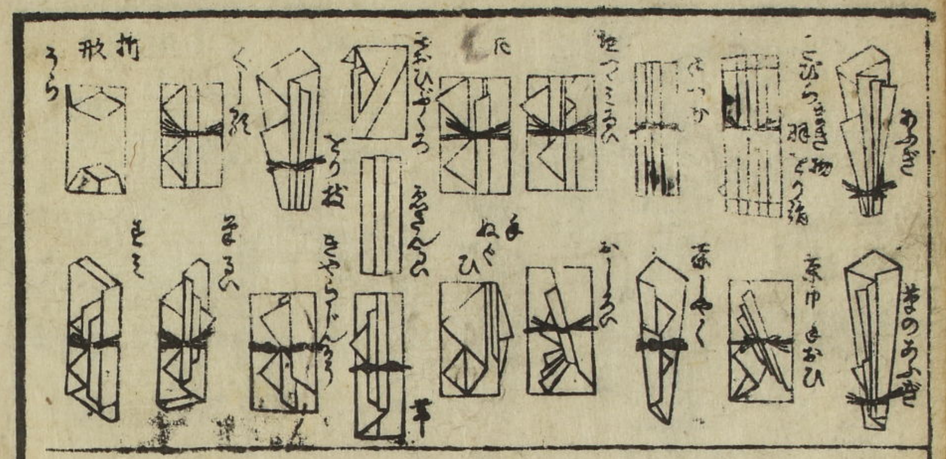
御古産あづかり
糸巻くべく巻
牛ゆくこりくつ
糸繰まのつ事よて
おもう海ゆくども
御祝ゆる事名 祝
つ歌ゆくこりくゆ
こつ月ゆくこと
まづいわくあく
月ゆくこりく

人女子ふ衣服
乃色などおはく
興を婚姻でむ
るよりも山家と
能をくること一生
外を保寶なるべ

小笠原折形畫



古御御人よく百
年紙を出して女
子を嫁をもること
を初く十万錢と
おしてゆを御入
ふてゆ初ずと



いとせ織るうれ女
るれ親るる人洗程
と知ぞんを有
蓋そ

蓋軒貝原先生述

十二月の異名

正月 初春	二月 梅月	三月 桜月	四月 卯月
五月 皐月	六月 水無月	七月 文月	八月 葉月
九月 長月	十月 神無月	十一月 霜月	十二月 師走月

書畫一筆

洛西嵯峨山麓 下河邊拾水

天保二年辛卯新板
同 十四年癸卯補刻

書林

京 右野屋仁兵衛
江戸 同 濱原屋茂兵衛
同 山崎屋清兵衛
同 岡田屋嘉七
大坂心斎橋通博労町角 丁子屋平兵衛
同 河内屋茂兵衛

三都

義延元中本 戊本 忘佛